

シンポジウム事例紹介②

学校収蔵資料を用いた企画展の開催と博学連携のあり方について

小田原市郷土文化館 土屋 健作

はじめに

小田原市郷土文化館では、2024（令和6）年8月1日～10月20日の会期で、企画展「学校に眠るお宝展」を開催した。

博学連携の強化を目的として企画した展示会の開催にあたり、様々な学校と関わり、教員と接してきた。一連のやり取りを通じて感じたこと、展望などを記しておく。

企画展示の目的

学校の資料室には、児童・教員が学校周辺の遺跡で採集したとみられる土器や石器などの考古資料、住民から寄贈を受けた民具類が所狭しと収蔵されている。かつて昔の暮らしを学ぶ教材として利用されていたようではあるが、資料を知る教員の異動や、教育方法の移り変わりによって日の目を見なくなり、その存在が忘れ去られた物たちである。

そこで、これらの資料を整理して展示し、歴史的価値、教材としての有用性を教員に伝え、授業で活用してもらうことを目的としている。

近年、児童数は減少傾向にあるが、駅前集中や教育体制の多様化などの事情により教室が足りず、資料室を教室に変える事例が続いている。この様な中、置き場の無くなった資料が廃棄される事案も生じている。学校側のやむを得ない事情も分かるが、有用な教材としての認識が深まれば、資料の保管場所も配慮されるのではないか、という思惑もある。

このような体裁の整えた「目的」は、展示に先立ち実施した資料調査の中で、学校の現状を知り、教員と話す中で定まってきたものである。

始まりは、いったいどれだけの資料が学校にあるのか、展示会として成り立つのか、学校は協力してくれるのか、先生とはどのような人なのかなどの不安を抱えながら、ぼんやりとした視界の中、学校との接触を開始した。教育委員会を通じて照会

文を送付し回答を求める方法では、多忙な学校からこちらの望む回答は得にくいと考え、前触れも無く学校の代表電話にかけることから始まった。

学校との接触

小田原市には公立小学校25校、公立中学校11校がある。その全てに「何か古そうなものはありますか？」と電話をかける。ここで早速、小学校と中学校の違いが表れる。

小学校の教員は、教える科目が限定されない性質上、社会（歴史）の教鞭を多くの教員が経験している。そのためアンテナが高く、電話を取った教員から早々に「古そうなものがある、ありそうな部屋がある。」といった話げできた。教員によっては、「前に赴任していた小学校にはあった。」など他校の状況まで教えていただける方もいた。

中学校は「社会科担当の教員に伝え、心当たりがあれば折り返し連絡させる。」という対応で、折り返しの電話は2件、該当資料は無いとの返答であった。

学校側から僅かでも情報が引き出せれば、早速実見調査に向かった。

学校での調査

学校によっては綺麗に整理された資料室もあったが、ほとんどが防災倉庫や運動用具置き場の一角に置かれていたり、棚の下の埃だらけの段ボールを開けたら土器や瓦が入っていた事例もあった。実際に確認したところ、土器や埴輪は本物ではなく教材用レプリカであった例もあったが、情報を教えてくれた先生に感謝しながら確認を進めた。当初は考古資料に限定した展示を企画していたが、中・近世以降に開拓された平野中央部付近の学校には農具や民具が中心に収蔵されていたことから、地域ごとの特性を叙述するためにも、民具も対象にした展示に方向修正を行った。

展示制作

資料は採集場所や寄贈元が不明なものが多いが、丘陵上や周辺の学校では縄文土器や弥生土器などがみられ、低地では古墳時代以降の資料、近世以降の開墾地では民具類がみられるなど、地域の歴史を叙述する材料は整った。

展示のレイアウトは、学校の団体見学を想定し、地域・学校ごとに展示ケースを配置した。展示物は破片資料が中心であるため、いかにして来館者に大昔の生活をイメージさせるかが課題となり、縄文時代のジオラマを作成するなど工夫を凝らした。(図1)



図1 展示の様子。

展示関連イベント

(1) 「教員のための博物館の日」

国立科学博物館が旗振り役となり、学校の先生に「博物館に親しみを持ってもらうこと」、「博物館の学習資源を知ってもらうこと」を目的として、参加各館で催しを開くイベントである。本館も今回から参画し、土器片を観察して標本箱を作るワークショップを開催した。

児童が資料を採集してきた際に、採集場所を記録させ、大切に保管することを伝える実践的な訓練になると思っていたが、実際にこの経験が役に立ったとの声は聞こえてこない。ただ、参加教員と親しい時間を過ごし、現在も関係が続いていること、参加者の同僚からも出前講座や資料貸出し等の依頼をいただいていることから、大元の目的は達成されたと考えている。

(2) フィールドワーク「荻窪の遺跡を歩く」

親子参加で市内の野山を歩き、土器を採集して観察するイベントを開催した。

(3) 講演会①「学校に眠る郷土のお宝を発掘！」

学校になぜ土器片が集められたのか。子供たちを夢中にさせる土器採集の魅力について、元考古ボーイの東京大学設楽博己名誉教授と現役の考古ボーイ鈴木陽磨さん達が語り合った。

(4) 講演会②「学校教育と博物館の連携」

現役の教員と学芸員が対談し、博物館と学校が連携してできることを話し合った。教員からは、博物館に眠る資料こそ知りたいという意見や、出前授業や資料借用の依頼手続きの簡略化について要望があり、R7年度より運用方法を改善した。

展示資料の返却

展示終了後は、資料と解説パネルを箱に並べ、そのまま授業等で使える状態で返却した。学校によっては、職員室前や渡り廊下に設置された。

展示会終了後の学校との連携

展示開催以来、例年よりも多くの学校から出前講座や見学の依頼をいただいている。特に、教員同士の横のつながりからの広がりを実感しており、地道ではあるが今後も口コミで広がることを期待したい。最近では、小学校4年生国語の授業「ごんぎつね」で、火縄銃、魚籠、お歯黒、袴、木魚を授業で借用したいとの相談をいただき、慌てて民俗資料の収蔵庫を探し回った。学校に眠るお宝展をきっかけに、今度は逆に教員側から博物館に眠らせている資料を掘り出される、恥ずかしくも嬉しい事態となっている。実物を教卓に置くことで、教科書の挿絵よりもう少しイメージを膨らませながら読むことができる「ごんぎつね」「たぬきのいとぐるま」などのパッケージを用意していきたい。

また、学校の管理者からは、資料室の扱いについての相談が続いている。博物館の収蔵スペースに限りがある中、地域の資料が守られ、活用される環境を維持するためにも、各学校と連携して、共生を図っていきたい。